

NJ 素流協 News

令和 8 年 1 月 10 日

第 252 号

令和 8 年 1 月 10 日発行・発行所 ノースジャパン素材流通協同組合 〒020-0024 盛岡市菜園 1 丁目 3-6 (農林会館 5 階)
TEL 019(652)7227 / FAX 019(654)8533 / <https://www.soryukyo.or.jp>

年頭所感

ーウッドファースト、国産材ファーストの時代に向かってー

ノースジャパン素材流通協同組合

理事長 鈴木 信 哉



が最も影響を受けることは明らかです。国内資源があり、40 年間森林率が増加せず、蓄積が増加成長している木材(国産材)は、優位性が高いといえます。

こうした中、新設住宅だけでなく、リフォーム住宅、非住宅の木材・木質化、鉄・アルミ・プラスチック製品に移行したサッシ、内装、家具、日用品に至るまで、総ての物品の木材への回帰が必須と考えられます。

管柱の WW から国産スギへの流れは、その先頭の機運が高まっている今ですが、まだまだ木造住宅市場であっても、国産材の自給率は低いのが現実です。新設住宅着工戸数の指標だけが、林業・木材業界の指標ではないのです。

今年は、ウッドファースト、国産材ファーストの時代に向けてのスタートダッシュの始まり、加速の年になると確信しています。

そのためには、川上・川中・川下の連携、産学官の連携が基本です。このスローガンは、全く連携が出来ていないから叫ばれてきたのです。駅、SA・PA、バス待合所、空港等の公共的物件はもとより、補助金等も投入されている福祉施設、大型病院、学校、庁舎等のありとあらゆる物件への働きかけが必要です。

それには、迅速な情報流の確立が必須の責務です。当組合としては、今年も、組合員の皆様、供給先の皆様とのマッチングに邁進して参る考えです。

最後に、山にお金を還元して、再造林意欲の拡大につながるよう職員一同努めることを確約して、年初のご挨拶といたします。協同組合の理念である組合員ファーストに邁進いたします。

明けましておめでとうございます。昨年は、組合員の皆様、供給先の皆様のご協力により、当組合として一定の水準をキープして前進できたことに感謝申し上げます。さて、今年度はどうと、新設住宅着工戸数の低下により、木材需要は厳しいと一般的には言われています。しかしながら、円安の影響は、海外に原材料を依存している石油・ガスのエネルギーや、鉄・アルミ・プラスチックの資源

特集 2

組合主催□ニュージーランド林業視察研修報告(後編)

ノースジャパンス素材流通協同組合

経営企画管理部経営管理課長 立花 由美

この11月、海外の林業の取組から学び、今後の事業運営に活かすことを目的として組合企画による初の海外林業視察研修を実施しました。後編では、前編のPANP AC社視察に続き、ニュージーランド北島で実施した視察内容について紹介します。現地の最新技術や取組を通じて、日本との違いや今後の方向性をより深く考える機会となりました。

Waratah Forestry Equipment (トコロア)

ニュージーランド到着3日目、ネイピアからロトルア方面へ約200km移動し、トコロアにあるワラタ社の工場を訪問しました。この訪問は、日立建機日本株式会社様のお取り計らいにより実現しました。



2500th 622B

「622B」製造2,500台目を祝って

当日は、ゼネラルマネージャーのポール氏および製造部門のベン氏から、工場の歴史や製造工程について詳しい説明を受けました。ワラタ社は2023年に創立50周年を迎え、工場内には創業当初から現在までの歩みを物語る従業員の写真が展示されており、企業としての歴史と誇りが感じられます。



Waratah社でのプレゼン聴講の様子。日立建機日本(株)様のご協力により急遽見学の間機を得ることができた。

工場は製造エリア、整備・検証エリア、部品の流通センターの3つに分かれており、主力製品は600シリーズのハーベスタヘッドです。全13種類のモデルが製造され、その約90%が海外市場へ輸出されています。

製品は中型・大型・特大型の3つに分類され、622Bは2004年の発売以来、約3,500台が製造された人気モデルです。視察時には世界最大級とされる特大型モデルも製造されていました。



数々の先端的な取組を紹介するレイモンド氏。胸が躍るような驚きの発想・技術が数多く示された。

FG R社は、ニュージーランドの林業界が出資して設立された研究開発機関で、産業界と政府が連携し林業分野の技術開発を進めています。今回は、2019年から2027年まで実施されている労働力不足の解消や安全性・生産性

FGR
FOREST GROWERS
RESEARCH (ロトルア)

各製品は大径木にも対応できる高性能仕様で、ジョン・ディア社向け製品の製造など、ラインアップの拡充も進められています。



FGR社のホームページに私たちの訪問が紹介されました！ぜひご覧ください！（翻訳機能を使えば日本語でも読むことができます）



の向上を目的とした大規模研究プログラム「フォレストリー・ワーク・イン・ザ・モダン・エイジ」について、伐採・物流プログラムマネージャーのレイモンド氏より説明を受けました。

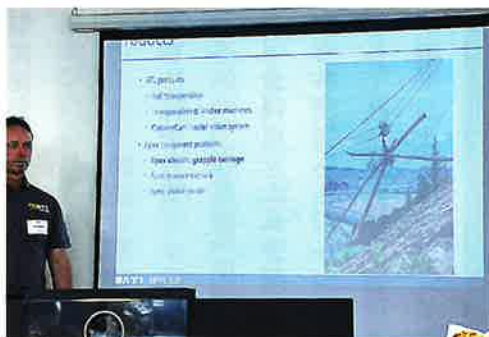
紹介された主な技術として、手作業伐倒の危険を減らす遠隔操作型フェリングウェッジ、アタッチメント交換を自動化する自動クイツクカプラ、集材作業の負担を軽減

するケーブルヤードの半自動化などがあります。また、デバーカー後のバーク残存量を自動で計測する品質管理技術や、丸太の反り・曲がりや機械で測定するシステム、ペイントやタグを用いない自動丸太ID技術も開発されています。

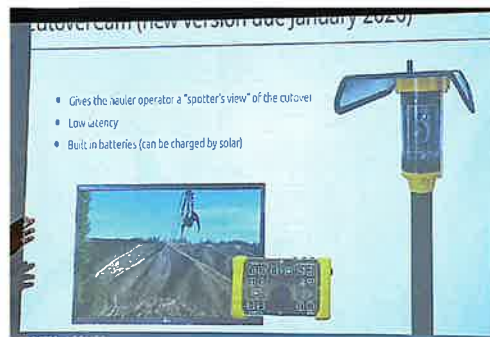
さらに、林地残材回収の効率化や自動チェーン掛けシステムなど、作業者の危険低減と現場効率向上を目的とした技術が多く紹介されました。これらの研究成果は将来的な商業化を見据え、林業現場の安全確保とコスト低減への貢献が期待されています。

ATL (APPLIED TELEOPERATION LTD) (ロトルア)

ATL社は、2017年に設立された林業向け遠隔操作技術と映像技術に特化したスタートアップ企業で、FGR社と連携しながら技術開発を進めています。FGR社の前身であるFGR社の伐採安全プログラムを起点に誕生し、急



ATL社ミリケン氏。集材機のフルテレオペレーションや視認性向上システムなど、林業の安全性と効率化を支える技術が示された。



ATL社の主力製品「CutoverCam」。高精細・低遅延の映像によりケーブル集材作業時の視認性を高め作業効率と安全性の向上を実現。

傾斜地における安全性向上、省力化、自動化を主な目的としています。今回は設立メンバーの一人であるミリケン氏から説明いただきました。

ATL社は、遠隔操作（テレオペレーション）と高画質カメラによる映像支援を組み合わせ、「人を危険から遠ざける林業」の実現を企業理念としています。主な技術として、オペレータが機械に搭乗せず操作できる完全遠隔操作システムや、伐採地を俯瞰するCutoverCamが紹介されました。また、外部パートナーと共同で、電動グラップルキャリアリッジやショベルヤード、グラップルカメラなどの開発も進めています。現場近くに設置する遠隔操作キャビンや、傾斜や振動を再現する体感型シミュレータの開発も特徴的です。2026年末までに急傾斜地での手作業伐採をゼロにする目標を掲げ、世界的にも先進的な取組を進めています。

SCION (森林研究所) と レッドウッド森林公園 (ロトルア)

この日の最後、国立研究機関 SCION (ニュージーランド森林研究所) を訪問しました。SCIONは、ラジャー・パインを中

心とした森林資源の活用、木材加工技術、バイオマテリアル、循環型産業などを担う研究機関です。

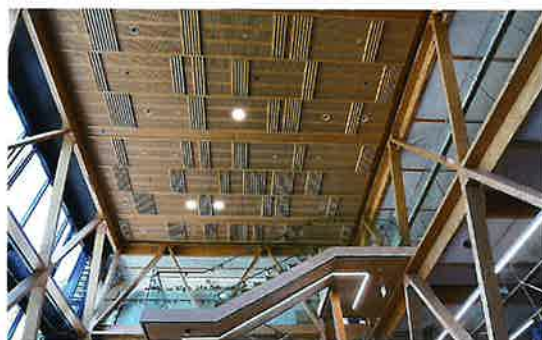


マオリ語では「Te Papa Tipu（成長する場所）」と呼ばれている。

まず、木材利用と耐震技術を融合した研究施設の建築についてお話を伺いました。建物は免震構造を採用し、CLTと大断面集成材を組み合わせた設計により、木材使用量を最小限に抑えつつ高い耐震性を確保しています。天井や照明には、ラジアータ・パインのDNA構造やマオリの新年を象徴する星座「マタリキ」をモチーフとしたデザインが取り入れられ、木



三角形の梁が連続する本部棟「Te Whare Nui o Tuteata（トゥテアタの大きな家）」。耐震性に配慮した斬新な構造と高いデザイン性が評価され、国内外の建築・デザイン賞を多数受賞している。



SCION施設内の木製天井。ラジアータ・パインのDNA構造をモチーフとしたデザインで、3つの照明はマタリキ（昴）を表現している。

材建築とマオリ文化の融合が象徴的でした。また、使用された木材は長期的な炭素貯蔵を担い、解体後の再利用も想定されています。



大径レッドウッドをバックに記念撮影。林内には多数のレッドウッドが立ち並び、いずれも大径木へと成長している。樹林全体としてのスケールの大きさが実感できる。

続いて、植林地から発生する林地残材を活用したバイオエネルギーについてプレゼンをしていただきました。安定供給が可能な木質バイオマスは、再生可能エネルギーへの転換を進めるニュージーランドにおいて重要な資源とされています。

その後、隣接するレッドウッド森林公園を散策。ロトルアにある代表的な森林公園で、レクリエーション利用と森林管理が両立している事例であり、かつての試験林として始まった外来樹種カリフォルニアレッドウッド（セコイア）



見上げるほどの高さを誇るレッドウッドが奥深くまで続く林分。静けさと迫力を併せ持つ空間が広がっている。

の立ち並ぶ林内は圧倒的で、同国の豊かな森林資源の可能性と樹木の成長量を目の当たりにしました。

ワイヤーサポートによるテザーシステム伐採現場（カハロア）

4日目、ロトルアから約20km離れたカハロア地区にあるポート・ブレイクリー社の伐採現場を訪れ、ワイヤーサポート式テザーシステムによる急傾斜地伐採を視察しました。この方式は、フェラーバンチャの安定性を確保し、急峻な地形でも安全に伐倒作業を行うために導入されています。

現場では、斜面上部に設置したウインチ搭載のベースマシンが、ワイヤーでフェラーバンチャを常



ウインチアシストによる伐採のデモンストレーションを見学。28年生ラジアータ・パイン、生産量は350～400m³/日。

時牽引しています。ウインチは最適な張力を自動で制御し、機体の前後動作を認識して牽引力を調整するため、オペレータによる細かい



オペレータは牽引されている右下のフェラーバンチャ側にひとりのみで、そこから左上のウインチアシスト（無人）を遠隔制御する。



Waratah社のアタッチメントを装着したフェラーバンチャ、ウインチアシストにチェーンで繋がれている。

張力は現場条件に応じて選択でき、常に一定以上の張力を保つ「ポジティブテンション」により事故

防止と作業効率の向上を両立しているそうです。急傾斜地という厳しい作業環境の中で、テザーシステムを活用した高度な機械化が進んでいる点に大きな驚きを感じました。急傾斜地林業における安全性向上を強く意識した、非常に印象的な現場でした。

な操作は不要。また、ワイヤー長はドラム回転数から自動計測され、過巻きや緩みを防ぐ仕組みとなっていました。



地面に埋設されたアンカーが抜けたり異常な動きを検知した場合、テザーシステムが自動停止＝「人が止める」のではなく機械が自動で止まるのだ！

ワイヤーサポートは無人で運転され、フェラーバンチャ側から無線操作されており、安全な位置から安定した作業が行われていました。ワイヤーはローラーや滑車を極力使用しない配慮とすることで、摩擦低減とメンテナンス性向上が図られています。

張力は現場条件に応じて選択でき、常に一定以上の張力を保つ「ポジティブテンション」により事故防止と作業効率の向上を両立しているそうです。急傾斜地という厳しい作業環境の中で、テザーシステムを活用した高度な機械化が進んでいる点に大きな驚きを感じました。急傾斜地林業における安全性向上を強く意識した、非常に印象的な現場でした。

ワイボウア・フォレスト／タネ・マフタとカウリ博物館（ノースランド地域）

ロトルアからオークランドへ戻った翌日の視察最終日、バスで北へ約3時間、ノースランド地域にある森林保護区ワイボウア・フォレストを訪れました。同森林は、ニュージールランドに残る最大級のカウリ松原生林の一つで、かつて広く分布していたカウリ林の貴重な残存地です。なかでも、数千年の寿命を持つとされる巨大なカウリ「タネ・マフタ」は圧倒的な存在感を放ち、原生林特有の静けさと重厚な雰囲気の中で、自然の力強さと長い歴史を体感しました。

その後訪問したカウリ博物館では、カウリ材の利用史や伐採・加工技術、カウリ琥珀採取の歴史などが体系的に紹介されていました。館内には実物の大径木や大型製材



縦にスライスされたカウリの展示。奥の壁には、過去に存在した大径カウリの直径が示されており、その規模の大きさが一目で分かる。

機械も展示されており、カウリ林と地域産業、暮らしとの深い結びつきを理解することができます。原生林の保全と木材利用の歴史の両面から、ニュージーランド林業



カウリの樹木そのものだけでなく、工具・林業機械、巨大な加工木材、家具、写真、さらには半化石化した天然樹脂「カウリガム」など貴重な資料のコレクションが豊富に展示されている。



ニュージーランド最大級のカウリの巨木、タネ・マフタ。マオリ神話の森の神「タネ」に由来する名を持つ、森を象徴する巨木。その圧倒的な存在感は写真では十分に伝えきれない。屋久島の縄文杉とは姉妹木。

の背景を学ぶ貴重な視察となりました。

まとめ

今回の視察研修では、伐採現場、研究機関など、多様な視点からニュージーランド林業を見て参りました。各視察先に共通していたのは、「安全最優先の姿勢」「技術革新への強い意欲」「計画的で効率的な造林・施業」「環境と地域社会への配慮」といった、ニュージーランド林業の基盤を支える考え方であり、特に、企業による長期的な森林経営、テザーシステム伐採に代表される安全性向上の取り組み、現場でのデジタル技術の活用、そして研究機関や各企業での研究開発などは、国全体として林業を成長産業として捉えている姿勢を強く感じさせました。

今回の視察を通じて得られた知見や気づきが、参加された皆さまにとって今後の業務や現場の改善につながる良い経験となれば幸いです。

最後に、快く視察を受け入れてくださった各視察先の皆様に心より感謝申し上げます。また、視察の企画・調整のみならず現地においても丁寧な解説をしてくださった酒井先生、酒井先生と密に連絡を取りながら現地調整・視察同行いただいたパトリックさん、現地在住の立場から通訳及び解説を通じてご支援いただいた松木さん、そして共に参加された皆様に、あらためて心より感謝申し上げます。加えて、本研修を企画する原点となる示唆を与えてくださった先輩、組合が主体的に企画することの重要性を示し背中を押してくださった組合員の皆様にも、この場を借りてあらためて深くお礼申し上げます。

今後の視察研修については、組合員の皆様からのご意見やリクエストを参考にしながら検討していく予定です。国内外の先進事例や関心のある分野がありましたら、ぜひお知らせください。

特集3

ノースジャパン素材流通協同組合 令和7年度
第1回林業講演会 国産広葉樹利用新時代に向かって

「素材生産者も意識改革！」 後編

NJ素流協は11月18日(火)、今年度第1回目の林業講演会「国産広葉樹利用新時代に向かって」素材生産者も意識改革！」を盛岡市で開催しました。

先月号に引き続き、後編の意見交換の内容をお伝えします。

【司会】

NJ素流協 理事長

鈴木 信哉

【パネリスト】

千歳林業株式会社

経営企画部部长

奥村 隼右氏

信州ウッドコーディネーター

香田 るい氏

カリモク家具株式会社

取締役副社長

加藤 洋氏

NJ素流協 鈴木理事長(以下 鈴木)

まず、千歳林業の奥村さん、

どのようにしてたくさんの社員を集めているのかということ、若い人は、機械化に慣れると広葉樹のチェンソー伐採は嫌がらないかな？というところ、2点お伺いします。



NJ素流協 鈴木信哉理事長

千歳林業(株) 奥村隼右氏(以下 奥村) まず、従業員についてですが、

当社は、道内の林業事業体の中では、比較的、給与水準は高いと思います。また、昨年から週休二日制を導入したので、そういったところに魅力を感じる方もいらっしやいます。広葉樹の伐採については、玉切りや伐

倒等は、ある程度ハイブリッドバケットで対応可能なんです。まだ試験段階ではありますが、グラップルソーでの伐採、枝払いにも取り組んでいる最中です。

鈴木 ありがとうございます。ちなみに従業員の募集の「手段」はどういうものを利用していますか。

奥村 ホームページ内の求人募集ページの運用の他にも、大手求人サイトの活用や、人と人のつながりによる噂で入社を決めた方も結構いらっしやいます。

鈴木 続いて香田さんに伺います。展示販売会(つなぐ木のいち展)のメンバーは、木工業界の集まりの既存メンバーの他に、新たに加わった人もいたのでしょうか。

信州ウッドコーディネーター 香田るい氏(以下 香田) 今回は、もうすぐ半世紀の歴史ある信州木工会にご協力いただきましたが、長野県内の木工家は世代交代を迎えています。県内には上松技術専門学校という教育機関があり、修了生が県内各地で活躍していて、その情報収集から

同志が増えていきました。また、県職OBなど応援してくださる方々につないでいただき、木祖村お六櫛組合など県指定伝統的工芸品も加わり、これまでになかったネットワークに、この輪をさらに広げてゆきたいと考えています。

鈴木 今回集まった人たちは、今まで、広葉樹材をどこから集めていたのでしょうか。講演の中で、県外から調達する人も多いと伺いましたが…?

香田 色々なパターンがあります。講演で紹介した「信州の広葉樹材活用講習会」で講師をしていただいた木工家は、自ら県内の木材市で原木調達して家具を制作しています。ただ、こうした木工家はごく一部で、他の木工家は、営業に来る他県の商社経由で乾燥材を購入することが多いようです。また、時代背景の中で安く入手できる外材、ナラではなくオーク、サクラではなくチェリーを使用してきた木工家も多いようですが、SDGsやゼロカーボンの視点で疑問を感じていた木工家もいて、

県内で入手できるなら活用したい、少しずつ変えていこうという思いが「つなぐ木のいのち展」につながりました。

鈴木 分かりました。次に、カリモク家具の加藤さんに材料調達について伺います。特定の樹種だけ指定して集めるのでしょうか、それとも、何でも良いよと自由に集めるのでしょうか。

カリモク家具(株) 加藤洋氏(以下

加藤) 基本的に樹種の指定はしませんが、一部、実験として、主に飛騨地区の小規模間伐で出てきた広葉樹を、小径であっても全て買い取り、出口を作っていくやり方をしています。

鈴木 ということは、その実験的な広葉樹が商品化できるとなれば、東北でもそういった樹種の発注を期待して良いでしょうか。

加藤 もちろんです。弊社の本社は愛知県にありますが、原木市に出てくる立派な丸太だけでなく、中々価値づけされていない丸太も、家具づくりを通じて生かせないかというこ

とで、北海道や秋田県に拠点を設けた歴史があります。ですので、その原点に帰って、木を付加価値高く生かしていくことを東北でも実践していきたいと思っています。

鈴木 かつてより価格が大きく下落しているのがケヤキです。こうしたものを活用することはありますか？

加藤 ケヤキ自体はとても良い木なので、私たちのラインナップの中にケヤキのバージョンを作り、展開しています。歴史的にも大事にされてきた素晴らしい材料ですが、今は残念ながら用途が無いので、私たちとしては、新たな用途を見出したいと思っています。

鈴木 ありがとうございます。それでは奥村さんに戻ります。川中・川下から、「今、こういう広葉樹が欲しい」という情報や注文は入ってきますか？

奥村 詳しい情報はあまり入ってこないのが現状です。川中・川下側に聞けば教えていただけますが、道内の市況や銘木市等で、ある程度の情報は回ってくるので、そうした市況

に応じて広葉樹の伐採計画を決めています。

鈴木 講演の中で、クセのある木を集めた「迷木市」が興味深かったのですが、売れ行きはいかがでしたか。

奥村 本家の銘木市と比較するともちろん値はつきません(笑)。ですが、今まで山に置きざりで、パルプにもならなかった木を売れる場を作る意義が大事だと思います。昨年からスタートしたばかりですので、もう少し規模を拡大して、皆さんの目に留まるような運営方法をしていけば必然的に価格も上がってくるのかなと期待しております。



千歳林業(株) 奥村隼右氏

鈴木 特別な値段の木はありましたか？

奥村 特別な値段ではないですが、中が空洞になっているナラの木で、(芯がない部分も計算して)1換算で1万円程度がありました。私は十分な値段だと思っています。

鈴木 LP比率が高いという話でしたが、製紙工場向けの皮が剥けない広葉樹の枝条は林地残材になっているのでしょうか。

奥村 はい、林地残材で残していたのですが、今、そうした枝条を専門に買い取る業者がいます。枝条を置いておくことで、植栽面積が若干減少していたということもあったので、我々としてはそれを引き取ってくれるのはありがたいですし、実際、業者に依頼もしています。パイオ発電用ですね。

鈴木 ありがとうございます。次に、香田さん、木工クラフト作家関係は、県庁(行政)ではどこが所管なのでしょうか。

香田 信州ウッドコーディネーター活動を通して、それが問題だとわかりました。現状は林務部と産業労働部の間にありますが、今回の展示販

売会には、次長や課長など林務関係者にご来場いただき、多様性ある広葉樹利用にも取り組んでいかなければならない、つかい手(河口)により近い木工品のつくり手(川下)も取りまとめていかないと、と仰っていたきました。



信州ウッドコーディネーター 香田るい氏

鈴木 カリモクさんにも似た質問をしたいです。家具業界は経済産業省所管なのですが、そこから、山の方向へ広葉樹需要の情報を伝えるような活動は聞いたことはありませんか。

加藤 詳しいことは存じ上げないのですが、私は聞いたことはないですね。むしろ今、行政に入っていたく形ですと、「リサイクルの仕組み

づくり」の話はしているようです。

鈴木 一般の家具業界と行政の連携ってどうなんでしょうか。

加藤 もちろん行政の助けがあると心強いですが、むしろ、自分の足で現地に通い、実態やヒントを教えてもらうやり方をしています。ある視察先では、足繁く訪問した結果、虫食い材をたくさんみせてくれたことがあります。私たちのようなメーカーや、クラフトの方、地域を超えてどうネットワークを作るかが今後の課題の一つかなと思います。そこに行政のサポートをいただけたとより心強いですね。

鈴木 ありがとうございます。林野庁の木材業界の範疇には、二次加工・三次加工業界が入っていないという課題があって、広葉樹活用で連携していく際にその課題がポイントになるかなと思っています。千歳林業さん、先ほど、プラットフォームの話も出しましたが、今の広葉樹需要の径級、長さといった情報は、木を伐る従業員に共有されていますか。
奥村 はい、各現場の責任者レベル

に情報を落とし込んでいます。プラットフォームをまさに作っている最中ですが、生きた情報を共有していく中で、新たな取り組みや発想を生み出す目的もあり、DB化を進めています。

しやいますが、他県の市場や木工会社による落札が多く見受けられました。県内でチラシを出す等宣伝はしているようですが、長野県には、広葉樹の人工乾燥まで一貫している製材所が少ないことにも起因します。もう一歩踏み出して変えていこう、開拓していこうという意識はまだまだこれからかと。私は、そうした旧態依然から前進したい気持ちで3年間、コーディネーターとして仲間を増やしてきましたが、県全体の意識改革が課題だと思っています。

奥村 入っています。広葉樹の搬出間伐は、基本的には10月中旬〜4月頃までを中心に行っています。それ以外の時期は、針葉樹を伐っていますが、そこでも広葉樹材は出てくるので、それは用材として各商社を通じて製材工場へ行っています。

鈴木 県で大きく市をやってみても良いように思いますが、いかがでしょうか。

鈴木 やはり、従業員全員が木の価値を理解してどう採材したらよいか分かることが大事なポイントだと思います。次に、香田さん、講演の中で、広葉樹を中々県内で集められないという話でしたが、宣伝不足でしょうか？何が原因なのでしょう。

香田 各市に毎月通っていますが、地域により出材される樹種などそれぞれ特色があり、来る方もそれを目当てにビジネスが成り立っているようです。

鈴木 分かりました。次に、加藤さん、日本の広葉樹の海外市場の可能性は高いと思われませんか。

加藤 当社の輸出の比率は8%ほどで国内がほとんどですが、海外へ持つ

香田 11月に記念市が行われました。熱心に入札する県内の業者もいらっ

ていくと、日本のメーカーが確たる理由を以て日本の木を使つて…というコンセプトにとっても心を寄せてくれます。その上で、デザイン、クオリティ、プライスの話につながっていきます。海外のデザイナーと関わることも多いのですが、「日本ほど色々なクラフトが残っている国は無い」と喜んでくれます。日本のクラフトはとても競争力があり、必ずマーケットはあると思っています。

鈴木 広葉樹の「オフィス家具」としてのニーズは高まっていますか。

加藤 とつても高くなっていると思います。弊社のメインは一般家庭向けですが、住宅着工戸数との関連性が高く、様々な課題があるのが現状です。ただ一方で、オフィスや教育現場での人気は高く、「いかに来たるようになる居心地の良いオフィスを作るか」というように、オフィスの要件そのものが変わってきているので、表情がたくさんあってユニークな広葉樹は、温もり感のある素材として相性が良いようです。学校も、少子化の中いかに学生に来てもらう

かという点で、学生食堂の椅子等きれいなものを使うところが増えています。様々な形で木の魅力を伝えていけば、かなりポテンシャルはあるかなと思っています。



カリモク家具(株) 加藤洋氏

鈴木 加藤さん、もう一つだけ、ナラ枯れの被害木を使う話が講演で出ましたが、今、岩手県では大船渡市の森林火災被害木があるんです。そういうったものの活用を、大手企業にPRするといった活動もできそうですかね。

加藤 ぜひやらせていただきたいです。家具を選ぶ際に、この家具はサステナブルかどうかで判断する企業が出てきて、国産材の活用機会が増えてきました。虫食い材の

話も、「柄が面白いよね、味があるよね」のほかに、虫に食われるという自然の摂理、ストーリー性で選んでいただくような独自のマーケットも出来つつあります。



会場の様子

鈴木 では、最後に、今回の講演のテーマ「国産広葉樹利用新時代に向かって」、考えていること、やりたいことを各人に伺いたいです。

奥村 講演で、用材率は20%で、残りはパルプ類になっているとお話しました。山側では「使えないよね」と思いながら伐るかもしれませんが、やはり、使い手によって木の価値は無限大だと思っています。今回の講演会を機に、様々なものへの使用率

を上げていきたいですし、山・広葉樹材に対しての向き合い方を見直すきっかけになりましたので、無駄のない採材をしていきたいと思っています。

香田 私は、「つなぐ木のいのち展」の活動を継続していくために、「信州白馬山麓のミズナラ、信州善光寺平のクリ、信州安曇野のヤマザクラ」のように、樹種名の前に、全国的にも知名度が高い長野県の魅力ある地名を入れ、それを付加価値として、誰でも親しみやすい木工品の普及につなげたいと考えています。また、私はものづくりだけでなく、生態系豊かな森づくりをライフワークとしているので、今回集まったメンバーで、次のステップとして、自分たちのづくりに生かした広葉樹を山に植え、育てる、森づくりを実践したいと考えています。川上から川下を木工家自ら体験することで、森林の循環につなげたいと思っています。

加藤 カリモク家具(株)は、使う側として、どうマーケットを広げていくか、持続的な形でどう事業化するか、

信念を持って取組んできました。一方で、国産広葉樹の利活用に関して、熱量を持った人たちはどのくらいいるのか悩むこともありました。ですが今回、国産広葉樹の有力な産地の東北地方で、こうして講演を聞いていただき心強く思いました。このことをきっかけに国産広葉樹の新たな利活用に向けて、川上から川下まで、行政も含めて連携して明るい未来を築いていけたらと強く思いました。

鈴木 皆さん、ありがとうございます。素材生産業界も、国産広葉樹の有効な活用に向けて頑張っていきたいと思います。

講師の皆様、ありがとうございました!!

トピックス

盛岡地区安全伐倒競技会で
NJ素流協青年部会が補助
として参加しました

11月28日、岩手県林業技術セン

ター（矢巾町）において、盛岡広域振興局林務部が主催する「盛岡地区安全伐倒競技会」が開催されました。本競技会は、若手林業従事者の作業技術向上及び安全作業に対する意識醸成を図ることを目的として開催されるものです。

管内事業体に所属する若手林業従事者を対象とした一般の部と、盛岡農業高校の生徒を対象とした高校生の部が行われ、当組合青年部会から5名が高校生の部における審査補助として参加しました。高校生の部では丸太輪切りの正確さ等を競い、安全作業を心がけ、熱心に取り組む様子が見られました。

車両系木材伐出機械等の 特別教育を実施しました

NJ素流協は12月2日～3日及び8日～10日、岩手県林業技術センターにおいて、車両系木材伐出機械等の運転の業務に係る特別教育（伐木等機械、走行集材機械、簡易架線集材装置又は架線集材機

械の3区分）を実施し、12組合員から17名が受講しました。

当組合では林災防各県支部が実施する教育を定員漏れ等により受講できなかった組合員が多い場合に実施していますが、今回で12年連続の開催となりました。

注意
今年の4月1日から
「白トラ」への
規制が強化!!

2026年4月1日から、白トラに関する規制が強化されます。

この規制は、無許可で有償貨物運送を行う白トラを取り締まるために導入され、今後は荷主も処罰対象となります。

【概要】

●荷主が、違法な白トラ事業者に運送を委託した場合、処罰の対象になります。

●貨物自動車運送事業者及び貨物利用運送事業者に対し、再委託の回数を原則2回以内に制限する努

力義務が課せられます。

●貨物自動車運送事業者のみが対象だった、運送契約締結時の書面交付義務が、貨物利用運送事業者にも適用されます。

詳細は国土交通省ホームページをご確認ください。

国土交通省HP

https://www.mlit.go.jp/report/press/jidosha04_hh_000346.html



お知らせ

注目!
「再造林促進奨励事業」の
助成金申請の受付を
開始します!

例年、当組合では、再造林を促進するため、組合員が実施した再造林に対して助成を行っています。

昨年度に引き続き、以下の通り助成金申請の受付を開始します。

【助成条件】

- ①地拵えに重機（グラップル等）を使用すること
 - ②各県の再造林基金等からの助成を受けていない場所での再造林であること
 - ③対象樹種はスギ、ヒノキ、カラマツ、アカマツ、広葉樹とする
- その他詳しい内容や申請書等はN J素流協のホームページからダウンロードできます。

申請書の提出期限は令和8年2月10日（火）までです。

本助成金に関するお問い合わせは経営企画課 野田までお問い合わせください。

里山広葉樹利活用推進シンポジウム
「森の彩を暮らしへ」開催
鈴木理事長が参加します

2026年2月24日（火）、東京都で開催される、一般社団法人日本森林技術協会主催の里山広葉樹利活用推進シンポジウム「森の

彩を暮らしへ」に鈴木信哉理事長が、講演者及びパネラーとして参加します。

シンポジウムでは、各講演者による国産広葉樹利活用の取組の紹介と、今後立ち上げ予定のプラットフォームのあり方についてパネルディスカッションが行われます。

参加申込等の詳細は、一般社団法人 日本森林技術協会のホームページをご確認ください。

（一社）日本森林技術協会HP

里山広葉樹利活用推進シンポジウム
「森の彩を暮らしへ」開催のお知らせ
https://www.jafta.or.jp/contents/information/571_list_detail.html



林地残材を活用しませんか？

N J素流協は、林地残材を活用したいという方と素材生産業者様とのマッチングを行い、共同販売事業として、バイオマス発電所に納入しています。

マッチングのご希望がありましたら、営業企画部までお問い合わせください。

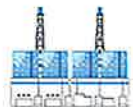


素材生産者

ノースジャパンの役割
素材生産者・活用したい方

マッチング

活用したい方



素材生産時に出材するD材
（丸太・末木枝条・短コロ）
を林道脇に集材する



活用したい方がD材を山土場で購入
林地にて移動式チップパー機を活用し
現地破碎をおこない、
チップ車に積み込み
林地から各バイオマス発電所へ納入



メリット

- ・造林作業のコストの削減
- ・造林が進むことで作業環境の安全化と効率化
- ・健全な森林環境サイクルの確保



メリット

- ・不足している原料材の確保
- ・現地破碎により輸送コストの削減



ちよつと気になる木の話

114

県外資本の木材加工業進出
には反対するのか？

— 東北の現状から考えると —

当組合のスタートは、ホクヨープライウッド

(株)のロシア材から国産材への転換がスタートである。第一次ブーチン政権の丸太輸出関税付加がきっかけである。ホクヨープライウッド(株)は、セイホクグループで、グループ全体は東京といえる。石巻合板工業(株)は、静岡県(株)ノダが親会社である。秋田プライウッド(株)、新秋木工業(株)もセイホクグループであるが、元は秋田木材(株)であり、創設者は茨城県である。

最近の状況をみると、ファーストプライウッド(株)、青森プライウッド(株)は飯田グループであり、創業者の生まれは福井県であるが、東京で起業している。

以下、県外資本例を列挙する。

- ・中国木材(株)能代工場(広島県本社)
- ・協和木材(株)新庄工場(福島県塙町)
- ・(株)ヤマハ阿仁前田工場(静岡県、旧桜庭木材(株))

・(株)小林三之助商店(岐阜県)

・東神鋳造工業(株)(兵庫県、旧相澤銘木)

・遠藤林業(株)大館工場、岩手工場(福島県古殿町)

・(株)キーテック大館工場、釈迦内工場(東京都、旧秋田グルーラム(株))

・(株)門脇木材(福島県、協和木材(株)出資)

・(株)玉山製材所(福島県郡山チップ工業(株)出資)

・(株)吉本岩泉工場(長野県)

他にも沢山ある。地元資本で休廃業した工場なら、県外資本で工場が継続されれば、良かったと地元では歓迎されるが、全くの進出だと、地元業界はどうかとの声も今まではあった。でも、川上から見ると、川中の充実はだれが考えてもウェルカムである。

製材だけでなく、プレカット工場でも、大館の昭和木材(株)は旭川で、岩手にも北海道の企業が進出している。製紙工場は当然県外資本だが、大手バイオマス工場は、津軽、野田、一戸、秋田、花巻、大仙、酒田他ほぼ県外資本である。

このことによって、地方の最大の課題である働き場が無いことによる人口減少、特

に若者減少、少子高齢化の解消に、川上・川中ともに貢献できることとなる。

そこで、中小の製材工場はどうしたらいいか？である。本来の地域の大工・工務店・地域ビルダー向けが盛んだった時代は最盛期を過ぎてしまい、回復の見通しはないかな。となると、以下の方式が一つである。

①大型工場では、経営者も使うのがもったいないと言う高齢級、目詰まり材を利用する工場になる

②大型工場で供給が難しい3・65m、3mの製品を作る

③素材生産業と兼業して、川中の生産コストを大手工場に近づける

④川下の建築業と兼業して、川下の建築コストを下げる

⑤地元地域産材、特別注文長・大径材の受注にも柱を置く

⑥大型工場が、樹種が多様でやりにくい広葉樹製材に転換する

等の取り組みがあるかと思うが…。

本当は、全国市場で不足の銘木、化粧材、広葉樹材等は別にして、地域の利用用途を確実に増加させて、流通コストも考えれば有利である地域の安定需要を確保すること

にある。

現実的なのは以下の通り。

市役所・役場関係、消防署・交番・郵便局、畜舎、ビニールハウス代替骨ハウス、果実箱・魚箱、プラスチックポール代替木材ポール、土木工事用看板・仮囲いフェンス・三角ポール、ビル内サインボード、コンベニア・スーパーの棚、飲食テーブル・イス、木造カーポート、温泉の浴槽・木桶、酒類製造の樽等、目を360度回して見えるものすべてである。

そして、時代の変化に対応している企業が生き残る。合板は南洋材、ロシア材利用等外材中心だった。集成材大手の中国木材(株)、齋藤木材工業(株)は桶樽生産業が始まり、川井林業(株)、協和木材(株)は素材生産業が始まり。木炭卸売業から始まった(株)中川原商店や、名前通りの、マッチ製造の十和田燐寸軸木(株)もある。

需要は年代とともに常に変化する。変化にうまく対応すれば、日本をリードする大きな企業に躍進することが実証されている。競合する企業が、同じエリア内に立地することは、地域だけでなく中小企業にとっても、喜ばしいことと確信している。私は…！

令和8年12月分の販売実績

樹 種	合板・LVL用			製材・集成材・その他用			計		
	当月出荷量 (m³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)	当月出荷量 (m³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)	当月出荷量 (m³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)
ス ギ	12,104	97.9	88.8	17,133	95.1	140.8	29,237	96.3	113.3
カラマツ	5,625	93.6	108.0	496	25.0	657.4	6,121	76.5	115.8
アカマツ	2,996	89.2	137.3	23	72.3	48.6	3,019	89.1	135.4
その他	36	122.4	*	160	22.6	75.2	196	26.6	92.3
合 計	20,761	95.4	98.8	17,812	85.9	142.4	38,573	90.8	115.0

樹 種	燃 料 用		
	当月出荷量 (t)	前月比 (%)	前年同月比 (%)
ス ギ	2,910	49.0	102.7
カラマツ	3,870	47.5	95.5
アカマツ	1,523	128.9	96.1
その他	1,182	63.6	144.8
合 計	9,484	55.4	102.2

樹 種	今 年 度 累 計			
	合板・LVL用 (m³)	製材・集成材・その他用 (m³)	計 (m³)	燃 料 用 (t)
ス ギ	106,538	146,022	252,561	36,039
カラマツ	55,971	3,968	59,939	40,058
アカマツ	21,694	265	21,959	8,538
その他	137	2,358	2,495	7,994
合 計	184,339	152,613	336,953	92,630
目標達成率(%)	73.7	82.5	77.5	77.2
計 画 量	250,000	185,000	435,000	120,000

注) *印は前月又は前年同月実績がなかったことを示す。

【令和8年1月の需給動向】

- 製材・集成材工場のスギ原木不足は続く。特に製材は3m材・集成材は4m材が不足。
- 合板工場は依然、納入制限が続く（特にスギ）。アカマツは工場在庫も少なく、引き合いは強い状況。
- カラマツは集成材工場及び合板工場で引き合いがあり、杭用製材工場でも小径木不足状況。

耳からウロコ

農文協の取材から

思い出したこと

―木酸液と満州引き揚げ者開拓地？―

先日、農文協の記者が、広葉樹の現状についての取材に見えられた。季刊雑誌の取材だったが、元は現代農業の記事を書いていたと車の中で伺った。そういえば、一時期、現代農業で木酸液のPRをして、特定農薬認定への取組みを大きく取り上げていたのを思い出した。しかし、品質が安定しないことから、農薬担当部局は認めてくれなかった。当時、その判断を担っていたのは、農薬工業会の科学的知見を持つ千葉大学園芸学部教授だった。アプローチをしていたが、なかなか難しかった。ある日、先方から突然連絡があり、面会することになった。その日は、木酸液の話をしたが、松くい虫被害の担当者は「千葉大のその教授が来ているなら会わせて」と何か別の話にもつながった。

ところが、そこで先方から、担当の農薬とは全く違う相談があった。「私は、父が満州からの引き揚げ者で、宮崎県小林市の国有林内の引き揚げ者向け開拓地に住んでい

た。しかし、小さかったので思い出はあるが、その場所が分からない。もし分かったら教えてほしい。」との話だった。特定農薬問題もあり、開拓地が林野庁からみでもあり、「二応、調べてみます」と回答した。かつての知り合いに、小林市役所に相談に行ってもらい、引き揚げ者の名前を伝えて調べたら、バッチシその場所が判明した。小林市から山へ深く入った場所、もう人は住んでいなかったが、廃屋があるエリアだと。教授にお伝えしたら、是非行きたいとのこと、場所が分かる地元の人が案内することとなった。当日は、教授のお姉さまも同行して、「現地確認をして感動した」とのこと、後にお姉さまが御礼に來られたと記憶している。

戦後の引き揚げ者向け国有林開拓地は、私の故郷の秋田森吉山の中にもあった。実家の集落にも、集落にはない苗字の人も何軒もあり、その人も、帰るところが無いので、実家に引き揚げる満鉄の人に、一緒に俺の故郷に帰るか？と言って集落に來た人だった。大変だったんだなと思った。

東北の国有林の夏場の虫くい材防止対策として、水源に近いところは農薬ではなく、天然素材である木酸液が使われているが、今だに特定農薬にはなっていないかな？